

まだ見ぬ 君への 贈りもの-5- -遊びの道具をつくる-

Presents to you whom I do not see yet -5- - making some tools for play -

後藤 哲男¹
GOTO Tetsuo

キーワード：木製、想像力、玩具、子ども
Keywords：Wooden toys, Imagination ability, architectural ability, child

This year I held third exhibition of wooden playing tools in gallery mu-an in March (2017), and presented playing equipments that were fabriqued after the second exhibition of 2015.

In this paper I will verify the effect from the attitude taken by the children in contact with the work, find the improvements and summarize about the possibility of a new tool for play. And I explain some works made in new to have desire to stimulate the imagination ability and the architectural ability of children.

1. はじめに

『どの時代の子どもも反応するような遊び道具にするためにはどうしたらよいのか、子どもが大切に思い、面白さを発見し、次世代に受け渡すために、未来の子どもが箱の蓋を開けた時、はっと息を呑むようなものを作りたい。』との動機は維持している。平成 29 年 3 月に 3 回目の「遊びの道具展 3」-まだ見ぬ君への贈り物-を開催した。

平成 27 年 10 月に第 2 回の「遊びの道具展 2」を開催し人々の反応と「木のおもちゃ」の可能性という新たな視点

を見出した。本稿は第 2 回展示から 1 年の間に設計・制作した作品についての報告である。

2. 「カラーコンポジション」 No45

2-1 制作概要

前回の報告で No43 「モンドリアン」を提案・制作（写真 1. 2）した。この「モンドリアン」シリーズは原則として、モンドリアンの作品である「コンポジション 2 赤、青、黄」（1930 年）で使用された白、黒、青、赤、黄の 5 色を使う。大きさ 67mm 四方の正方形に一辺 33mm の正方形、26mm の正方形、16.5mm の正方形と長さが 67mm と 33mm で幅が 6mm、16.5mm、26mm、33mm の長方形を並べる。モンドリアン風の色の組み合わせと日本の織物の縞模様（問道とも）の色の組み合わせを楽しむ。樺で造った 80mm の立方体になる小物入れの蓋に 68mm の正方形を 5mm ほど彫り込んだ部分に並べ変える趣向で制作した。

上記寸法の厚さ 7mm の朴の木を切り出し、漆に限りなく近いカシュー塗料（商品名）で塗装した。カシュー塗料には水色に近い青色がなかったため、青は普通のラッカーを用いた（写真 1）。

この作品を通してカシュー塗料との出会い発見があった。カシュー塗料はカシューナッツの殻からしぼった油を使った塗料である。漆に似た性質を持ち、肉持ちがあり、塗膜は光沢があり、研ぎだすと一見漆と見分けがつかない。また、漆のようにかぶれることもない自然乾燥塗料である。さらに、漆の色数は様々あるといわれているが、純白はなく、メーカーが供給する色は限られている。対して、カシュー色は日本の伝統色を踏襲しており、色数も豊富である。

上述したモンドリアン色の中で、カシュー塗料にはないラッカーの水色が調和を欠くことが判明し、カシュー塗料の持つ色で、遊びの道具を展開することとした。また、大きさ 67mm を原則としていたモンドリアンは 1 辺 100mm の正方形に拡大し、先の木片の寸法に 67mm 角の正方形を追加して、色の展開を図った（写真 3）。



写真 1 モンドリアン



写真 2 ストライプ



写真3 1辺100mmの正方形への展開 カラーコンポジション (No45)

2-2 仕様

2-2-1 基本単位

基本単位となる箱を制作する。1辺120mm、高さ15mm、幅9mmの櫟の棒を留に加工し、底板を取付る(写真4)。

底板は100mm角に3mm凸になるようにし、この基本単位は何段にも重ねることができる。7段に蓋を重ねたものが1単位になり、概ね120mmの立方体となる(写真5)。この単位は「遊びのお重」として制作した「タングラム」「清少納言の知恵の板」や「遊びのお重 $(8 \times ab/2 + (a-b)^2 = (a+b)^2$ 」等の寸法と同等である。(長岡造形大学研究紀要第14号参照)

基本単位を持つことによって、44色(実際は透明5色にカラー3色で黒が2種)のうちから好きな7色を選択して自分なりの組み合わせを楽しむことが可能となる。



写真4 基本単位の箱



写真5 7段重ねの基本単位

その組み合わせの数は

$$43 \times 42 \times 41 \times 40 \times 39 \times 38 \times 37 \div (7 \times 6 \times 5 \times 4 \times 3 \times 2 \times 1) = 32,224,114$$

天文学的数字とはいわないまでのかなりの組み合わせ、3千2百万回が可能となり、子どもたちは色彩の微妙な関係性の世界で遊ぶことができる。

2-2-2 色彩

カシュー塗料は「カシュー株式会社」が商品化した塗料で先に説明した通りであるが、カシューオイルとフェノールなどが縮合されて製造される。乾燥に湿度を要する漆と異なりカシューの乾燥は空気中の酸素との反応であるため、自然乾燥または加熱乾燥で行われる手軽さがある。既存の色の名前を以下に列記する。

■透明のもの

ネオクリヤー、クリヤー、淡透、透、紅溜

■色のもの

クリーム色、レモン色、黄、濃黄、灰色、灰茶色
銀ねず、青ねず、ねずみ色、濃ねず、だいたい色
洗朱、朱、朱赤、本朱、緋、赤、鮮紅、紅、小豆色
えび茶、ぶどう色、かば色、たいしゃ色、黄褐色
こげ茶、若葉色、緑、濃緑、オリーブ色、あさぎ
青、なす紺、紺、黒、うるみ、黒艶消、銀色、白
以上の44色中43色を72mm角の朴木に塗装した。それを以下に示す。

写真6で明らかな、朱色系、緑系統と茶系統は、主流、白、黒、紺、銀が添えられている。透明は木肌を重視しつつ、飴色がかかった色調になる。日本の伝統色において青系統の代表的なものは藍染めの紺が主で、藍染めを染めるほどに紫がかってくるものをなす紺または紫紺となる。それと区別して、少し緑がかった紺を鉄紺と称している。その他に露草の青い汁で染めた花色と称する「青色」は深い青色である。神主の袴によく使われている浅葱色は淡い青緑色、対して上記色見本のなかには「あさぎ」と称する色はかなり緑灰がかっている。



写真6 43色



写真7 基本単位にランダムに納められたカラーコンポジション

2-2-3 制作-塗装

カシュー塗料の作業工程は以下の通り進めた。

1. サンドペーパーかけ
2. 木の面を平滑にし、木目や小口の繊維の穴などを処理する目止め下地処理。
3. サンドペーパー処理
4. 中塗りサーフェーサー塗り
5. サンドペーパー処理
6. カシュー塗料各色刷毛塗り
7. 耐水ペーパーで水研ぎ
8. 仕上げ塗り各色刷毛塗り
9. 耐水ペーパーで水研ぎ
10. 表面が納得できる仕上がりにするため8、9の行程を繰り返す

以上の工程から各色、2～3基本単位の各種木片を制作した(写真7)。その一部を下に示す(写真8、9)。

それぞれの基本単位に納まる形の構成は自由であるが、各寸法を万遍なく取り揃え、100mm角の面積のなかにしつかりと納まるように構成している。

2-2-4 制作-固定方法

逆さでも落ちないように、磁性に反応するステンレス430の厚さ0.4mmの板と直径3mm×高さ3mmのネオジウム磁石を利用した(写真10)。各木片の裏側に磁石1つを埋め込み、接着材でしっかり固定している(写真11)。万が一落ちて子どもが飲み込まないように配慮した。また、ステンレス板は67mm角と100mm角に切断し、小口を十分サンダーがけして怪我をしないようにした。

この磁石がステンレス板にくっつく時の感触は非常に心地よいものとなった。



写真8 7段重ねの色のコンポジションの例



写真9 7段重ねの色のコンポジションの例



写真10 構成ユニットの木片とステンレス板



写真11 構成ユニットの木片とネオジウム磁石

2-2-5 画面構成するための装置づくり

写真7はそれぞれの構成要素がランダムに並べられている。自由に形と色を選択して自分が組み立てる土俵を設定する必要があると考えた。少ないパーツで組み立てるものからより多くのパーツを使って大きなものをつくる段階に進むことを念頭におき、以下の通り構成する。

1. 68mm各のマット付き額縁 (写真12・13)
2. 100mm各のマット付き額縁 (写真12・13)
3. 200mm各のマット付き額縁 (写真12・13)
4. 100mm×300mmの枠 (写真14・15)
5. 200mm×300mmの枠 (写真14・15)

2-2-6 自由な構成と決められた枠と色の関係

トルストイは以下のように述べる。

「芸術は技芸ではなく、
それは、芸術家が体験した
感情の伝達である」



写真12 カラーコンポジションの額縁



写真14 100mm×300mm 200mm×300mm



写真13 カラーコンポジションをした後



写真15 カラーコンポジションをした後

子どもたちは感情のおもむくままにまず形と色を決定し、一番最初の正方形か長方形をはめ込むことになる。次々にその隣合う図形と色を選択して、はめ込む。最後はうまく図形が合わずに大変なことになるが、根気強く完成を目指す。

子どもは「現在」を生きているように考える。良い作品にするため次を選択するのではなく、隣り合わせたい気に入った色を選んでいる。

大人は最初の段階で、図形的な組み合わせを考え、配色計画を立てて作業を始める傾向がある。これは大学においてもエスキースと称して実行していることである。しかし、遊びとはそういうものではない。

子どもの作品はどれも個性的である。一方、大人の作品も個性的ではあるがどこか見たことがあるような印象もある。



写真 16 作品 (子ども)



写真 17 作品 (大人)



写真 18 作品 (大人)



写真 19 作品 (大人)

3. 個展での子どもたち、大人たち

遊び道具は時間がたくさんある人々のものだと考える。今回のカラーコンポジションは面積が多ければ多いほど時間がかかる。時間のない大人は最初はチャレンジするものの、なかなか最後まで到達しない。写真 17 から写真 19 は時間が十分あった大人の作品である。一方写真 16 は子どもの作品である。

トルストイの芸術論「芸術家が体験した感情の伝達である」に戻るなら、我々大人の感情は遊びにおいても人に見られるものをつくらるとなると、それなりに意識し、良いものをつくろう、かっこいいものをつくろうとする。さらに、「誰れさんがこれを造った」となると、まさに自分の沽券に関わる問題としてとらえてしまうことになる。意識せざるを得ない重大問題となってしまう。この重圧がある大人は、その忙しさを理由に手をだそうとはしない。

一方、子どもは「遊ぼうとする」。その時間を生きている子どもたちは、数分後や数時間後の自分の作品の出来上がりについては無頓着であり、遊べるという「現状の局面に最善を尽くしている」ように見える。自分が今どうしたいのにか非常に真剣ともいえる。

このような子ども達の観察から、例えば写真 16 の作品を造っている写真 22 の小さな女の子が、今手にしている赤い小さな磁石付きのパーツが「一体何に見えているのだろうか」と思えてくる。また、写真 20 の女の子は「今何を考えているのであろうか」とも興味深い。トルストイの芸術論を体現している姿が垣間見える。子どもの遊びに対する真剣な様子から大人が学ぶことは多い。



写真 20 カラーコンポジションの制作



写真 21 カラーコンポジションの制作



写真 22 カラーコンポジションの制作

4. 遊びの道具に期待していること

今回の主題は色である。既存のメーカーの提供する43種類の日本の伝統色をそのまま使っている。ここにおいて、独自の色彩論に基づいて色を決定することもできた。最初の命名は「モンドリアン」であり、彼の赤、青、黄色に黒と白を交えての配色であったが、これはモンドリアンの個人的な感覚に依存しすぎていると判断した。日本人であれば、漆の色や、鳥居の朱色、日本の古代から伝わってきた日本人の原点といえる色彩感覚が重要であると考え。カシュ株式会社が出す日本の伝統色を尊重しつつ、子ども達が日本の伝統的な色使いに接すること、また朱や緋色、緑や灰の様々なニュアンスの違いなどを感じ取ることも大切な要素であるように考える。

5. 4頭目の木馬の制作

1頭目と2頭目の木馬はロッキング式、3頭目がスウィング式であった。

3頭目のスウィングの回転軸が堅木同士の擦り合わせて造ったため、ぎざぎざ音がうるさかった。特に大人が乗ると激しく馬が喘いでいるような音を発していた。愛嬌はあったが、少し改善を試みた。4作目は回転軸にボールベアリングを挿入している。全部で4カ所であり、その結果音の問題は改善された。

この馬の特徴は通常のスウィング式の馬は4本足のそれぞれに回転軸を設け胴体の上で椅子のみがスウィングする方式である。今回は首としっぽの端部をピンで結んでいるために、首・座面・しっぽが連動してスウィングする。つまり鞍が中央に静止している時は300mmの正三角形が3つからなる台形ができ、図1のような動きになる。

材質は櫟の30mmの板を使用し、金物は使用せず、すべてホゾとダボで組み合わされている。鞍が取り付けられている隙き間は危険防止のために牛革で覆い、口に本物のハミをかませ手綱を取り付けた。

この馬は大人の体重にも十分対応しており、大人も子どもも楽しむことができる。

乗るのには少しコツがあり、鞍が前にいくと、首が引き寄せられる。そのため首のところにつけられたつかまり棒を持つ場合と手綱を持つ場合で重心の取り方が変わってくることになる。この乗り方の違いも楽しみのひとつにな

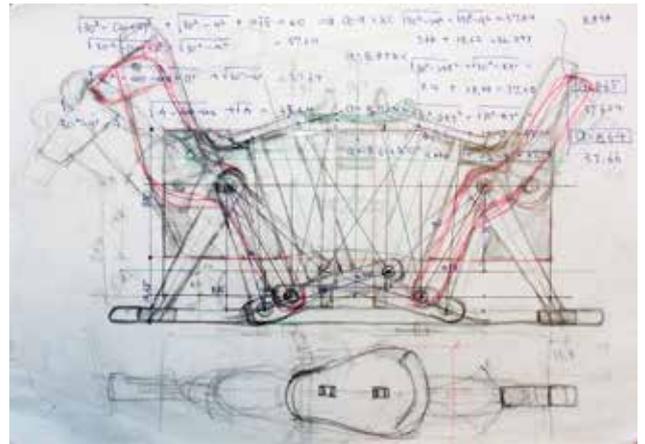


図1 木馬の簡単なスケッチ図

る。このような体験型の遊びの道具の場合は結果として作品が残るような遊びよりも老若男女が楽しめるような気がする。

6. まとめ

今回の個展は第3回目となった。あしかけ5年に渡って造り続けた「遊びの道具」であるが、往々にして個展の会場では作品には手を触れてはいけないことが多い中、どの作品も子どもたちは手にとり遊ぶことができるようにした。子どもたちは実に天真爛漫であり、面白いと思った遊びは時間を見つけて次の日も会場に足を運んでくれた。また、自宅に帰り同じようなものを造って見せてくれた子もいた。

3回も企画展としてくれたギャラリー mu-an は2017年の秋に閉じる。本当に立見迪子さんにはお世話になった。感謝の意を表します。

注釈

¹ 長岡造形大学 教授

² 詳しくは長岡造形大学研究紀要第11号・2013年 P148～158



写真23 4頭目の馬



写真24 会場には始め第2頭目の雌馬が子どものあいてをしている